

大漁
朝焼小焼だ
大漁だ
大羽鰯^{いわし}の
大漁だ
浜は祭りの
ようだけど
海のなかでは
何万の
鰯のとむらい
するだろう

金子みすゞ

詩人《金子みすゞ》を見つけ、世の中に送りだしてくださった矢崎節夫先生は、大学一年生の時にこの「大漁」の詩に出会い、大きなショックと感動を受けたそうです。矢崎先生には、本園の講演会に3度ほど来園いただきお話を伺ったことがあります。矢崎先生がみすゞさんを語られる時、実に生き生きと力強く、……だからみすゞさんは蘇ったのです…と言われていたのが印象的でした。他者のことを考えられずに、平和からほど遠い現代、今の時代にこそ、みすゞさんに蘇っていただきたいものです。

この「大漁」という詩を読むと浜辺の祭りの賑わいの様子が目に思い浮かびます。「魚が獲れたら嬉しい」というのは普通の考えですから、浜辺では大漁を祝ってにぎわっていたのでしょう。けれども、みすゞさんは、たくさんの仲間の鰯(いわし)が人間に捕らえられてしまって、鰯の立場になって悲しみ、葬式をするだろうと、うたっています。みすゞさんは「魚も一つの命である」と言っています。みすゞさんは、いのちを同等に見つめて、やさしくとおしい詩を書かれています。漁をする側、魚を食べる側の人間でなく、魚の立場になって考えているのです。物事を一方からだけではなく、違う角度からも見られるよう、私たちの心と目を広げたいものです。

